

オリンピックと筋肉的キリスト教

ジェンダー政治のアリーナ

本稿が公表される頃には、コロナ禍で開催が危ぶまれる中、変則的な形で開催された2020オリンピック・パラリンピック東京大会は、閉幕を迎えているだろう。健闘された選手の方々には拍手を送りたいが、宗教とジェンダーの視点からの考察も必要である。

2020東京大会に限らず、オリンピック一般についての批判研究は、北米のスポーツ社会学を中心に、これまで多くの蓄積がなされている。たとえば、ヘレン・ジェファーソン・レンスキーは著書『オリンピックという名の虚構』(2021年)において、その問題点を以下のように指摘している。招致過程における不正、世界規模の他の競技大会とも共通する商業主義、環境破壊、生活破壊(ホームレスなど弱者の排除)、残される多大な負債(東京大会の場合、果して「復興五輪」の理念はどこへ行ったのであろうか?)、ナショナリズム、植民地主義、さらに性別二元論への著しい固執、同性愛嫌悪、トランスジェンダー選手の排除、それらに伴うハラスメントや人権侵害などである。オリンピックは、まさにジェンダー・セクシュアリティ・ポリティクスのアリーナの様相を呈してきたといえる。

2014年のソチ冬季五輪直前に、ロシア議会による「反同性愛プロパガンダ法」可決に対する抗議運動が起き、結局、オリンピック憲章の差別禁止条項に「性的指向」がようやく加えられたのは、大会終了後であった。

また、陸上女子800メートルで五輪2連覇を達成したキャスター・セメンヤ選手(南アフリカ)は、テストステロン(男性ホルモン)値が高い、高アンドロゲン症の女子選手とみなされ、その出場資格を制限する世界陸連の規定の撤回を求めて、欧州人権裁判所に提訴した。筋肉や骨格の成長を促す同値が高い選手に対し、世界陸連は薬などで基準内に収まるように求めたが、セメンヤ選手はそれを拒否し、2020東京大会に向けては、別の種目での参加を目指した。一方、2019年4月、世界医師会の評議会は、高アンドロゲン症規定の即時停止を求め、世界の医師たちに、同規定に基づいた検査や非倫理的「治療」を行わないように呼びかけるなど、徐々に変化も起こりつつある。

とはいえ、「男っぽい女子選手を探せ」という詮索的眼差し、同性愛指向の選手に対するバッシングは、完全に払拭されているとは言い難い状況である。オリンピックのみならず、井谷聡子が述べているように、「近代スポーツは厳格な性別二元論の上に成り立ち、強固な男性支配が続く保守的な文化、空間、機関である。優生思想を簡単に内包し、競争原理で人を階層化する究極的な文化装置でもある」(井谷2021)。

キリスト教の「女性化」への反動

近代オリンピックの父、クーベルタンの銅像が、2020東京大会を契機に、都営霞ヶ丘団地(新宿区)跡地に設置された。クーベルタンはミソジニストとしても知られているが、実際、オリンピックでは、女性の参加は歴史的に厳しく制限されてきたのだった。そのクーベルタンのスポーツ教育思想とオリビズムに影響を与えたものの一つとして、「筋肉的キリスト教」が指摘されることが多い。

そもそも、19世紀中頃のイギリスのパブリックスクールにおいて、運動競技を正当化する根拠として用いられたのが「筋肉的キリスト教」であった。この思想は本国よりもアメリカで隆盛をみることとなる。従来キリスト教では、強健な身体と霊的神聖さは相容れないものとみなされていたが、他者への奉仕や社会改革への参加が説かれる「第二次大覚醒」(1800～1830年代)を契機に、身体的健康は成功のために不可欠であるという評価へと次第に変化していったといわれる。

クリフォード・パトニーは、アメリカにおける筋肉的キリスト教を、19世紀後半のキリスト教の女性化に対する反動と見なしている(Putney 2001)。ちょうどその頃、宗教的指導者の女性化(feminization)現象がみられ、それに対する男性的反動が起きたという。男性たちがビジネスでの成功を目指すようになっていくのに対し、次第に教会のリーダーシップは女性たちの手に渡っていったのである。統計的信憑性はともかくとして、1870年から1900年の間に、女性の聖職者が67名から3,373名に増加したとの記録もあるという(森本2012)。こうした「男らしさ」の危機に、男性的なキリスト教の復興が目指され、男らしさを求めた人々はスポーツを始めたのであった。スポーツはまた、教会から遠ざかっていた青年を再び引き寄せる役割も担っていた。そして、筋肉的キリスト教は、YMCA(キリスト教青年会)の諸活動に体系化されていくこととなる。国によっても異なるが、たしかに今でもYMCAにはスポーツクラブのイメージがあり、また女性版のYWCAでもスポーツや野外活動が盛んに行われている。

やがて、筋肉的キリスト教は世界的に広がり、近代アジアの形成にも影響を及ぼしていった(ヒューブナー2017)。日本では、新渡戸稲造による武士道とも結びついて、独自の展開を遂げていく。さらにクーベルタンを通して、近代オリンピックの理念に結実するのだが、筋肉的キリスト教の出発点が、パトニーの言うような「教会の女性化」への反動だとすれば、オリンピックにある性別二元論やトランス排除・女性排除の体質にも頷ける気がする。レンスキーも言うように、女性のスポーツへの参加が、「男のヘゲモニーが依拠する男女間の『自然』な境界線を不明瞭にする可能性を秘め、それゆえに家父長制社会の脅威となる」のかもしれない。

[参考文献]

- 森本あんり『アメリカの理念の身体』創文社、2012年。
 松下大樹「健康の殿堂—19世紀後半アメリカにおけるYMCAと筋骨たくましいキリスト教」(修士論文)、早稲田大学、2015年(https://www.waseda.jp/tokorozawa/kg/doc/50_ronbun/2015/5014A034.pdf)。
 シュテファン・ヒューブナー『スポーツがつくったアジア—筋肉的キリスト教の世界的拡張と創造される近代』一色出版、2017年。
 ヘレン・ジェファーソン・レンスキー『オリンピックという名の虚構』晃洋書房、2021年。
 井谷聡子『〈体育会系女子〉のポリティクス』関西大学出版部、2021年。
 Clifford Putney, *Muscular Christianity: Manhood and Sports in Protestant America 1880-1920*, Harvard University Press, 2001.